

Contents

- 巻頭言 ゴジラ、日吉を横断す
- 特集I 「日吉キャンパス公開講座」 「HAPP」
- 特集II 「日吉学」 「情報の教養学」
- 特集III 【教養研究センター設置科目】 身体知・音楽／生命の教養学／身体知・映像／
身体知—創造的コミュニケーションと言語力
- 特集IV 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座 「文化としての病と老い」
「教養研究センター選書」
- 特集V 【研究サポート】 「研究の現場から」 「教養研究センター選書」
- 活動予定 4月～9月、「学会・ワークショップ開催支援」
- 私の○○自慢



ゴジラ、日吉を横断す

教養研究センター副所長
高橋宣也（文学部）
Nobuya Takahashi

2016年に大きな話題となった映画『シン・ゴジラ』。ハリウッドで変容したゴジラのイメージを日本に取り戻したリメイクは幅広い層を刺激し、大量の動員数を獲得した。この私も複数回観に行ったのだが、一番上がったのは中盤の山場、「武蔵小杉決戦」の場面だった。鎌倉に再上陸したゴジラがゆっくりと北上し、自衛隊は首都侵入を阻むべく多摩川を絶対防衛線として陣を敷く。その場所は正に丸子橋の周辺であり、俯瞰になると多摩川から元住吉にかけての東横線沿線が一望される。普段あまりにもなじみの風景。そして武蔵小杉から日吉に向かってほぼ一直線に走る綱島街道の向こうにゴジラが立っている。ということは、ゴジラは日吉を通過したばかりであり、おそらく慶應日吉キャンパスの一部はゴジラに踏みつぶされたところに違いない。やがて武蔵小杉の高層マンション群を抜けて進む怪物に一斉砲撃が浴びせられる。

ここで感じたのは、リアルに映像化された実世界をゴジラという異物が横断していくことへの違和感、眩惑、そして蹂躞の快感。そこへ見慣れた日吉境界が舞台であるという日常的感触が加わるので、それらの感覚が増幅されて、一層の興奮を誘ったのだ。勤め先のキャンパスが侵されたことに倒錯した喜びを覚えたのは、まあ別の話。それよりこのシーンに限らず、この映画ではノンフィクションのごとき現実感とゴジラ来襲

のフィクションとのコントラストと衝突が極めて強烈なことが独特な基調となっている。ゴジラという「空想の産物」に大真面目に対処する「現実」の政治社会的な意思決定の段取りが、圧縮したテンポ感で描写されていく。その展開は様々な論議を呼んだが、一言で言えば「昭和の夢」ということではないかと私は思っている。日本の戦後成長を支えた官僚組織と産業力が、なぜか平成の世に理想的な形でフル稼働する。実際の日本は今や疲弊しているからこそ、「こうできたはず、なっていたはず」という心地よい幻想に導かれる観客。主人公の官房副長官の台詞「この国はまだまだやれる」に、その夢は託されている。

映画の宣伝文句は「現実対虚構」で、それぞれの項に「ニッポン」と「ゴジラ」が入るのだが、そこにはもっと広い概念を当てはめてもよいだろう。映画とは、いやそもそも芸術というものは、そうやって虚実皮膜の間に可能性を見出してきたのだ。イギリスのロマン派詩人コウルリッジの言を思い出せば、「所詮は架空という冷めた意識を進んで棚上げする」ことで虚に没入し、そこから想像力の行為としての批評が始まり、教養が発動される……などとゴジラに踏みにじられた（はずの）キャンパスで頭をひねっているうちに、奴は自衛隊を蹴散らし、多摩川を渡って行ってしまった。



日吉学

探求・体感：縄文人の見た日吉

「日吉学」の特徴は日吉を舞台にユニークな顔ぶれと手法と素材が合体し、知的冒険をすることです。2016年度は縄文をテーマに探検・体感3回コースを実施しました。第1回「触る！楽しむ！縄文ミュージアム」は安藤広道先生（文学部）と福田康史先生（木彫り土偶作家）を指南役として、縄文を学ぶ意義を喚起する講義に続き、学生のグループワーク、そして慶應義塾が誇る土器や土偶の優品に触れ、考えるという贅沢な授業となりました。軽量でしかも洒落た作りの縄文土器は、受講生に縄文のイメージを覆す知的興奮を与えたようです。第2回「プロジェクト・マッピングで体験！縄文時代の日吉の地形と暮らし」は太田弘先生（普通部）、藤森孝俊先生（普通部）、芝原暁彦先生（産業技術総合研究所地質調査所）をガイドとして、学生は地名がない地形図を前に躊躇いつつ日吉の位置と海岸線を書き込み（最後に採点返却！）、日吉の地形を想像することから始まりました。藤森先生による縄文期の地形自然環境の講義の後、地形図アプリ入りのiPadやiPhone片手に、普通部通りを抜け、赤門坂の急坂を下り、上総層群王禅寺層の露頭（縄文期の汀線）へ。リアス海岸の痕跡に触れ、6000年前の縄文海進と現代の温暖化の未来図が交錯する瞬間でした。教室では日吉と関東の地形とその形成をデジタル地図と3Dモデルを使ったプロジェクション・マッピングで擬似体験。第3回「日吉の森で縄文ランチ！ドングリクッキーは美味しいの？」は福山欣司・長沖暁子・持田浩治（経済学部）各先生の講義と手ほどきで、ドングリクッキーを作り縄文人の食体験をしました。実際にどんぐりやくるみを日吉の森で拾い、炙り、粉にし、焼き上げるまで普通部生から大学生、教員まで共に夢中になりました。考古学編・地理編・自然編の2回以上の参加者に「日吉縄文人」認定証が授与され終了。アンケート結果では講義と体験と討論を組み合わせることによって理解が深まったという意見が多く寄せられ、正規科目化に向けて、さらに2017年には準備を進める予定です。（不破有理）



情報の教養学

情報とリスク

2016年度の「情報の教養学」では、情報とリスクに着目しました。誰でも日常的にインターネットを通して情報の受発信できますが、それに伴うリスクについて、一流の講師による講演を実施しました。秋学期は、3回開催しました。まず、江口清貴氏（LINE（株））は、LINEの成り立ちから始め、LINEの利用状況に関する調査を通して、安全なSNSの利用などについて講演されました。次に、上原哲太郎氏（立命館大学）は、マイナンバーの概要を紹介した後、個人番号に関わるリスクをプライバシーとセキュリティの観点から解説しました。最後に、寺田真敏氏（（株）日立製作所）は、ウイルスなどによる攻撃方法の変遷を解説しました。特に、パソコンにインストールされたアンチウイルスソフトウェアをかいぐるような、ソーシャルエンジニアリングに基づいた攻撃手法が近年増えており、それに対処する難しさを挙げていました。なお、2017年度も、リスクに着目したテーマで、春・秋学期それぞれ講演を3回ずつ予定しています。（高田眞吾）

2016年度情報の教養学第4回講演会
慶應義塾大学情報学センター主催

急速なネット化がもたらしたもの
LINEが考える情報モラル/リテラシー啓発

10月5日(水)
16:30~18:00

講師：江口清貴（LINE株式会社）
司会：日吉キャンパス専任講師
シムラツクミカエ

対象：教員・教職員（無料、予約不要）
問い合わせ：toiwasase@ibad.kelco.ac.jp

@keioitc
http://ice.lib-arts.keio.ac.jp

2016年度情報の教養学第5回講演会
慶應義塾大学情報学センター主催

マイナンバーの情報リスク

10月26日(水)
16:30~18:00

講師：上原哲太郎
立命館大学情報理工学部情報システム学教授
司会：日吉キャンパス専任講師シムラツクミカエ

対象：教員・教職員（無料、予約不要）
問い合わせ：toiwasase@ibad.kelco.ac.jp

@keioitc
http://ice.lib-arts.keio.ac.jp

2016年度
秋学期ポスター

【情報の教養学】
2017年度春学期スケジュール

第1回
「増え続けるサイバー犯罪、サイバー攻撃からどのように身を守るか?!」
講師：松岡正人
4月19日(水) 16:30~18:00
来往舎シンポジウムスペース

第2回
「著作権の必須知識を今日90分で身につける！」
講師：福井健策
5月17日(水) 18:15~19:45
来往舎シンポジウムスペース

第3回
テーマ：プライバシー
講師：手塚悟
6月28日(水) 18:15~19:45
第4校舎独立館D202教室

2016年度情報の教養学第6回講演会
慶應義塾大学情報学センター主催

セキュリティインシデントから学べること

11月9日(水)
16:30~18:00

講師：中野直樹
株式会社日立製作所情報セキュリティセンター
司会：日吉キャンパス 第4校舎独立館D308
対象：教員・教職員（無料、予約不要）
問い合わせ：toiwasase@ibad.kelco.ac.jp

@keioitc
http://ice.lib-arts.keio.ac.jp

教養研究センター設置科目



身体を動かし自ら表現。設置科目のこだわりです。教養は頭で覚えるのではなく、身に付けるもの。そう相場は決まっています。アカデミックなスキルもやはり身に付くものでしょう。設置科目名に幾つも「身体知」と入るところが、わがセンターの味なのです。2016年度も教養とスキルを大勢が体に刷り込んでくれました。（片山杜秀）

2016年度の「アカデミック・スキルズ」—英語クラスの躍進続く

日本の大学でも英語の授業を増やそう。英語のうまい日本人を増やさないとこの国は生き残れない。そういう考え方が強まっているでしょう。「アカデミック・スキルズ」は、論文の書き方とプレゼンテーションの仕方を身に付ける授業ですが、そこで当然重要なのは、何語で書き話すかです。2016年度は日本語3クラス、英語1クラスの計4クラス。英語クラスは、授業中はすべて英語を用いるのが原則です。しかし、つい何年か前までは、この授業形態には困難が伴いました。英語で論文を執筆し、研究発表を行う。それに耐えられる学生が、なかなか集まらなかったのです。ところがこのところ状況は激変しています。学生の英語の基礎力が飛躍的に高まり、それに見合った教員の指導と相まって、2016年度の「コンペティション」では、論文とプレゼンテーションの両部門の金賞を、ともに英語クラスの履修者が得ました。もちろん日本語クラスも負けてはいません。問題設定の仕方から書き話す技術まで、スキルの向上には日覚ましいものがあります。将来的には英語クラスを増やすことが時代の需要にかなうかと思っています。（片山杜秀）

A hardest, but most fruitful lesson ever!

将来医学分野で研究をする私にとって、英語にて読み、話し、書く、このアカデミック・スキルズの授業をやり通せたことは素晴らしい糧となりました。4月には簡単な英語のサイトにも拒絶反応を示していた私が、今では専門的な論文にもアタックできるようになっていることは本当に驚きです。

英語が主言語ではない我々にとって、論文は何度も推敲ができるのでまだしも、プレゼンテーションをすることはとても大きなハードルでありました。同時に緊張しいな私に先生がくれた言葉は、“The best way to get ease is to practice and practice and practice!”で、その言葉通り不安を掻き消すために練習を重ねました。その結果として、自分の努力を注ぎ込んだ研究に対して、沢山の質問を得られ、議論を深められたことがとても嬉しかったです。論文部門だけでなく、プレゼンテーション部門でも金賞を頂けて非常に報われる思いでした。最後に、この授業を支えてくれた関係者の皆様、本当にありがとうございました。（医学部1年 佐藤正幸）

真の学問を体感した一年間

この度は論文部門金賞を頂くことができ、大変光栄です。私は「民主主義は今後どうあるべきか」という非常に漠然とした問題意識を論文という形で表すため、スイスの個別事例を取り上げました。膨大な資料を読み込み、資料一つ一つに意味付けを行い、全体のストーリーに組み込んでいく作業は、厳密な論理性が必要とされて非常に苦労しました。しかし、三人の指導教授の助言を踏まえてこの作業を完遂し、最終的に金賞を頂くことが出来たことは、自分の中でも大きな自信となりました。私は論文作成過程で出会った学問分野を三田での専攻に選びました。自分の将来の道標となってくれたこのアカデミック・スキルズに、心から感謝しています。

（経済学部2年 石崎雄大）

コンペティション入賞者一覧

■論文部門

賞	クラス	学部・学年	氏名	演題
金	火曜(英語)	医・1	佐藤正幸	Can we produce designer babies in Japan?: Analysis of rapid development in technology and concerns about gene modification
金	水曜	経・2	石崎雄大	スイスの「魔法の公式」の裏側—現代の民主主義国家が内包する問題とは—
銀	金曜	文・1	栗山和也	谷崎の虚偽と三島の真実—マンヒズムを通じて男性を考える—
審査員特別奨励賞	木曜	経・1	水谷 琴	バリアフリー日本語字幕とフォント—効果音の表現方法について—

■プレゼンテーション部門

賞	クラス	学部・学年	氏名	演題
金	火曜(英語)	医・1	佐藤正幸	Can we produce designer babies in Japan?: Analysis of rapid development in technology and concerns about gene modification
銀	水曜	理・1	中村太一	恋愛ソングの歌詞から恋愛観の変化を読み解く
銅	金曜	法・1	油下知広	現代社会に受け継がれた「弁論術」とは何か—「話し方」を追究し続けた人々の歴史から考察する—

「身体知・音楽」を終えて

「身体知・音楽I・II」は、住友生命保険相互会社の寄附講座として設置されていて、音楽を通じて築き上げてきている歴史および文化を、実践を通じて学ぶことを目的としています。成果発表は、主に公開演奏会という形で行って来ています。そこには、社会還元の意味合いをも持たせてあります。2016年度は、器楽クラス、声楽クラスの成果発表として計3公演を日吉で催しました。日吉での公開演奏会は、①2016年7月3日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・古楽アカデミー演奏会、「17世紀ヴァイン宮廷からの贈り物～ヤコブ・ルートヴィヒ手稿譜（1662）の器楽作品～」、②2017年1月8日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・古楽アカデミー・オーケストラ演奏会「知られざる、バロック・オーケストラのための舞曲」、③2017年1月15日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・アカデミー声楽アンサンブル演奏会「～ヘンリー・パーセル（1659-1695）～」でした。「身体知・音楽III・IV」は、株式会社龍角散の寄附講座として設置されています。この授業は、声楽アンサンブルに参加している学生に対して、声楽技術の向上を目的とした、トレーニングを行っている授業となります。（石井明）

2016年度の「身体知・映像」を終えて

「身体知・映像」の2016年度のクラスは、また進化を見せました。今年からいよいよ撮影から編集にいたるすべての過程をデジタル化しました。それにとまって映像のクオリティもまた一段と上がった気がしています。また一年間の締めくくりとなる翻案もいっそう自由度を増し、学生たちの生きているリアリティが反映された作品が出来上がりました。本年度は、川端康成の初恋小説集のなかから「非常」という短編を選び、そこからインスピレーションを得た印象的な二つの作品が完成しました。全編広島弁で繰り広げられる青春劇「冬の陽炎」とオタク系の少年の妄想と現実の交錯を主題とした「One Day」という作品です。この二作品は、アカデミック・スキルズ プレゼンテーション・コンペティションで上映されたのち、4月6日の「身体知・映像 映画上映会」でも上映いたしました。（佐藤元状）

2016年度

「生命の教養学—飼う」を終えて

—生殺与奪を握る、握られる場の風景

「飼う」というテーマを巡って11名の講師による講義に80余名が臨みました。身近なペットについて、近代ヨーロッパにおける愛玩動物誕生の意味と背景、日本のペットの殺処分、ペットとのコンパニオンシップについての三講義で学びました。養豚産業とチョウザメ養殖についての二講義は食べるための「飼う」の現状を照らしたし、実験動物についても本学の事例に即して学びました。「人が飼われる」現実については、古代ローマの奴隷と現代日本における人身売買をめぐる二講義に加え、人がみずから支配されようとする事例をナチズムの講義から学びました。腸内細菌をめぐる講義は人が体内に「飼う」微生物と人との深い関係を明かしました。動物の権利をめぐる倫理学の講義を含め、総じて生殺与奪を握る「飼う」現実の複雑な様相に打たれた授業となりました。（赤江雄一）

「身体知—創造的コミュニケーションと言語力」を終えて

2016年度の教養研究センター設置科目「身体知—創造的コミュニケーションと言語力」は、8月12日から17日までの6日間、通学課程の学生10名に加えて、併設をかけて履修可能になっている通信課程の学生8名を集め、初日から5日目までは毎日3限と4限、最終日は3限から6限までを用いた集中講座の形で実施された。テーマは2014年度につづいて、ビートルズ。初日から3日目の中盤までは、拙著『ビートルズは音楽を超える』を使ってビートルズのさまざまな側面（音楽、言葉、身体の動き）を学び、3日目の途中から呼吸など体の集中力ワークショップを開始した。4日目は眠っている創造力を刺激するダンスワークを行った。5日目は創作準備の日とし、最終日の成果発表では、言葉、絵画、音楽、パフォーマンスなどさまざまな面でビートルズに啓発された色とりどりの豊かな成果を互いに披露し合い、かつ、それらを批評的に語り合った。いつにも増して、批評力と創造力を繋ぎあわせることの大切さが痛感された。（武藤浩史）

神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座「文化としての病と老い」

講座「文化としての病と老い」の実施

教養研究センターでは、昨年度から引き続き神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座「文化としての病と老い」を開講しました。今年度は「老い」というテーマのもと、学生および一般を対象に、10月から12月にかけて、公開講義（全4回）とワークショップ（全2回）が行われました。公開講義では、文学、心理学、精神医学、老年学、歯学など様々な専門領域から「老い」が捉えられました。ワークショップでは、映画『楳山節考』を題材に老いや社会の中での老いの存在と営みについて議論されました。また、体育研究所のご協力のもと、高齢者の身体の疑似体験を通して「老い」を身体的に考えるワークショップも行われました。高校生から90歳の方まで多くの方が熱心に受講され、毎回の講義・ワークショップでの質問の時間には、活発で多岐にわたる質疑応答がなされました。受講生は「老い」について、多様な視点から理解を深められたのではないかと思います。

（高山緑）

ワークショップの実施

2月9日、神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア・ワークショップが、来往舎中会議室において行われました。朝9時に開会し、昼食を挟んで17時30分まで、6人の報告者が各60分を持ち時間にして発表と質疑応答、最後に教養研究センター所長による総括が行われました。このワークショップは神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア公開講座と同じく、神奈川県の医療と健康のプロジェクトから資金を頂いていますが、一般向けの啓蒙活動であるそれらとは性格を異にし、新しい課題として、医療者や医療行政関係者、そして一般の人々と研究者が、生命や医療について対等な立場で語り合う場を作り上げていくためのものです。運営委員の鈴木晃仁経済学部教授によってプログラムが設計され、当日は、この問題に関心のある研究者が全国から集まりました。日吉キャンパスにおける新しい学問分野としての Medical Humanities（医療人文学）の可能性を感じさせる非常に充実した研究会となりました。神奈川県プロジェクトとしては最終年となりますが、今後何らかの形で継続させていくことが望まれます。

（小菅隼人）

神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座
文化としての病と老い

10/12 (日) 16:30-18:00
超高齢社会を生かすヘルスとケア・ビーイング
高山 経 慶應義塾大学 理工学部教授

10/24 (月) 16:30-18:00
文化の中の居場所—日本の文学・文化作品を通して考える
高 経 慶應義塾大学 経済学部教授

10/29 (日) 13:00-15:30
高齢者の生活環境を考える—疑似体験を通して—
坂野 悦子 慶應義塾大学 体育学研究科教授

11/16 (日) 16:30-18:00
サクセスエイジングとメンタルヘルス
三村 勝 慶應義塾大学 医学部附属—総合医学部准教授

11/26 (日) 13:00-16:15
映画『楳山節考』1970年代の「老い」を見て老いを考える
片山 秀男 慶應義塾大学 文学部教授

12/15 (日) 16:30-18:00
口腔の健康を長く保つ
池田 通 慶應義塾大学 歯学部歯学系口腔顎顔面学講座准教授

特別講師 慶應義塾大学 教養研究センター



池田通講師(12月15日)



ワークショップ(10月29日)

神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティアワークショップ
文化としての病と老い

2017年2月9日(木) 9:00-17:30
慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎2階中会議室
入場無料・予約不要

9:00-10:00 開会 祝詞・開会式
10:15-11:15 基調 池田 通(日本歯科大学神奈川歯科大学) 慶應義塾大学 歯学部歯学系口腔顎顔面学講座准教授
11:30-12:30 昼食(15分) 12:30-13:00 シンポジウム「高齢者の生活環境を考える—疑似体験を通して—」
13:00-14:45 基調 坂野 悦子(慶應義塾大学 体育学研究科教授)
14:45-15:45 基調 三村 勝(慶應義塾大学 医学部附属—総合医学部准教授)
15:00-16:00 小冊子 配布(15分) 16:00-17:15 報告 池田 通(慶應義塾大学 歯学部歯学系口腔顎顔面学講座准教授) 高 経(慶應義塾大学 経済学部教授) 片山 秀男(慶應義塾大学 文学部教授) 坂野 悦子(慶應義塾大学 体育学研究科教授) 三村 勝(慶應義塾大学 医学部附属—総合医学部准教授) 池田 通(慶應義塾大学 歯学部歯学系口腔顎顔面学講座准教授)
17:15-17:30 総括 鈴木 晃仁(慶應義塾大学 経済学部教授)

主催：神奈川 慶應義塾大学教養研究センター 協賛：慶應義塾大学日吉キャンパス

教養研究センター選書 16 ペルーの和食—やわらかな多文化主義

本書は、100年を越えるペルーにおける和食の歴史について、具体的な史実に沿って紹介しながら、その変遷を鳥瞰的に論じたものである。一世たちが持ち込んだ和食が、長い時間をかけて少しずつペルー社会に向けて開かれ、日系食やニッケイ料理となり、ペルー社会に融合したときに、まったきペルー人としてのアイデンティティを持った日系人世代が、ニッケイ・フュージョン料理という新たなペルー料理の世界を開拓し始めている。ペルーという近代国家における和食の歴史を通して、暗黙のうちに特定の支配的な文化を前提としていたこれまでの多文化主義を超えてゆく、多様なものが並存し、相互に影響を与えてゆく中で生まれてくる、開かれたやわらかな国民文化としての多文化主義を拓く可能性が見いだされるのではないかと思います。

（柳田利夫）



教養研究センター選書

当センター所員が、その学術研究の成果の一端を、学生を中心とする一般読者にいち早く発信して新鮮な知の一石を投げ、研究・教育相互の活性化を目指そうとするものです。これまで17冊刊行されています。奮ってご応募ください。事前申込み締切:7月28日 原稿提出締切:9月29日

研究サポート「研究の現場から」

〈第18回「研究の現場から」〉

デュシャン〈大ガラス〉と初音ミク

—4次元と3次元と2.5次元と2次元

人工的につくられた女性、その表象についての考察を紹介しました。キーワードは次元です。戦後日本が生んだ漫画アニメの美少女キャラ、その記号絵は2次元。2.5次元演劇では漫画作品を3次元化する一方、立体的でありながら強烈な記号絵であることをやめない初音ミクは、さしずめ2.1次元的存在です。男の脳内彼女を物理化したのがアンドロイド美女ならば、デュシャンはオブジェ作品〈大ガラス〉を「4次元の3次元への投影」だと説明しました。次元と次元を隔てる有形無形のガラスの役割、また独身者機械神話との関係など、このたび問題提起させていただいたことを、参加者のみなさんからのご意見を参考に今後とも考えていきたいと思えます。(新島進)

〈第18回「研究の現場から」〉

古代ギリシア恋愛小説の世界

—エクフラシスを中心に

エクフラシス（描写）という語が古代の修辞学用語とは異なり、現在では芸術作品の精緻な描写という限定された意味で使われていることを説明したあと、ローマ帝政下のギリシア語世界で書かれた恋物語群における絵画描写の機能について考察しました。

劇的な場面の真っ只中から始まる『エチオピア物語』では、ヒロイン出生と関わる「アンドロメダとペルセウス」の絵が物語の中央部に置かれ、逆に洞窟で見た絵を物語にした体裁の『ダフニスとクロエ』は、物語全体が拡大版エクフラシスだといえます。また、『レウキッペとクレイトフォン』では奇数巻冒頭の絵画描写が後に起こる2つの出来事を予兆することで、読者・聴衆を2度驚かせる効果があることをお話ししました。(中谷彩一郎)

教養研究センター選書17 ロシア歌物語ひろい読み—英雄叙事詩、歴史歌謡、道化歌

豊かな口承文芸を誇るロシアでは、リズムにのせて調子良く語られる歌物語が数多く記録されてきました。中世の都キエフを守って敵や怪物と闘う勇士たち、リッチな外国の貴公子やすさまじい悪女、桁外れの豪商と愉快な芸人、実在したイワン雷帝や戦国の英雄たち。それらのテキストは口承文芸独特の修辞や古い語彙を含み、1つの筋にも短いものから数百行に及ぶものまで様々なヴァリエーションがあります。詳しいけれど単調な語り、美文なのに未完の「おいしい！」語り。そこで本書では、多くのテキストを比較して各物語の一般的な筋と典型的な表現を探って再話し、ここぞという名場面は語り口を活かした韻文訳にしました。限られた紙面で口承文芸の内容と語りを最大限に伝える試みです。各章に付した解説とロシアの画家たちの作品を助けて、ロシア歌物語の世界をのぞいてみてください。(熊野谷葉子)



【予告】

第19回「研究の現場から」

教員の方々にご自身の研究内容を自由に語って頂く「研究の現場から」は、毎回多彩なテーマで知的好奇心をそそられるお話を伺うことができ、軽食を交えての議論も活発で、日吉キャンパスの催しとして定着しています。2017年度も、研究交流のさらなる活性化を目指して、引き続き開催していきます。まずは6月に実施する第19回のご案内です。今回はお一人の発表になります。どうぞ気軽にお立ち寄りください。(高橋宣也)

2017年6月14日(水) 18:15～ 来往舎101にて

・呉茂松(経済学部)

「権利と権力のあいだ—現代中国の維権運動から考える—」

読書会「晴読雨読」 ついにレヴィナス読了!!

教養研究センター主催の読書会推進企画として、昨年度から始まった「晴読雨読」では、最初の企画としてエマニュエル・レヴィナス著『倫理と無限 フィリップ・モネとの対話』を読みました。4月27日、6月3日、29日、8月3日、10月5日、11月9日、12月21日と7回開催しました。参加者は毎回異なりましたが、平均して教員5名、学生5名でした。毎回、レヴィナスがご専門の商学部・渡名喜先生のわかりやすくユーモアあふれる解説を頼りに、それぞれが意見をかわし、ときには参加者全員で頭を抱え、教員・学生分け隔てのない、まさに半学半教の場となりました。2017年度からはブルーノ・ラトゥール著『科学論の实在 パンドラの希望』を読んでいます。興味のある方、いつでもぜひご参加ください。(工藤多香子)

**【HAPP】 ショブハナ・ラドハクリシュナ
(Shobhana Radhakrishna) 氏講演会**

「マハトマ・ガンジーの変革型リーダーシップと現代世界におけるその妥当性」
4月17日(月)、16:30～18:00、来往舎シンポジウムスペース

**【情報の教養学】第1回: 松岡正人
「増え続けるサイバー犯罪、サイバー攻撃から
どのように身を守るか?」**

4月19日(水)、16:30～18:00、来往舎シンポジウムスペース

**【基盤研究 講演会】第1回: 西村太良
「『オイディプス王』を上演する—古典と教養—」**

5月10日(水)、18:15～20:00、来往舎シンポジウムスペース

**【HAPP】「ライブラリーコンサート in 日吉
—図書館がコンサートホールになる2日間—」**

5月16日(火)(弦楽四重奏) 12:20～12:50、15:00～15:30
5月23日(火)(ジャズ) 12:20～15:50、17:00～17:50
日吉メディアセンター1階ラウンジ、地下1階 AV ホール

**【情報の教養学】第2回: 福井健策
「著作権の必須知識を今日90分で身につける！」**

5月17日(水)、18:15～19:45、来往舎シンポジウムスペース

【HAPP】「体育科目紹介と筋肉診断」

5月18日(木) 13:00～14:30、5月25日(木) 14:00～15:30
6月1日(木) 15:00～16:30、体育研究所1階動作解析室

**第19回【研究の現場から】
「権利と権力のあいだ—現代中国の維権運動から考える—」**

呉茂松
6月14日(水)、18:15～、来往舎101

**【情報の教養学】第3回: 手塚悟
テーマ: プライバシー**

6月28日(水)、18:15～19:45、第4校舎独立館D202教室

**【学会・ワークショップ等開催支援制度】
「日本地図学会学術大会 地図学アウトリーチワークショップ」**

8月9日(水)～8月10日(木)の内1日を予定、時間未定
日吉キャンパス、キャンパス外

【HAPP】「日吉音楽祭 2017」

7月8日(土)、10月7日(土)、14:00～、協生館藤原洋記念ホール

【教養研究センター選書原稿募集】

申込締切日: 7月28日(金) 原稿提出締切日: 9月29日(金)

4月

5月

6月

7月
8月

9月

学会・ワークショップ等開催支援

当センター所員が企画する研究会やワークショップ等を経費・広報の両面から応援する制度です。所員の方々が参加できる研究・交流の場を広げることを趣旨として、開催に伴う経費の助成や、日吉キャンパス内やウェブでの広報をお手伝いします。

募集は毎年2回、春学期開催分は1月末日まで、秋学期開催分は7月末日まで受け付けています。次回の締切は7月31日(月)です。ふるってご応募ください。なお、経費を必要としない広報支援については随時受け付けています。

【HAPP】「【異端のすゝめ】～真の一流になるために～」

5月15日(月)、16:30～18:00、第4校舎J21 番教室

【HAPP】「塾長と日吉の森を歩こう」

5月20日(土)、14:30 集合、まむし谷(散策)

【HAPP】「小林嵯峨舞踏公演～孵化する～」

6月2日(金)、18:30～20:00、来往舎イベントテラス

**【学会・ワークショップ等開催支援制度】
「日本演劇学会 2017 年度大会」**

6月3日(土)、4日(日)、10:00～17:00、来往舎、協生館

**【学会・ワークショップ等開催支援制度】シンポジウム
「全体主義と民主主義 クロード・ルフォールに寄せて」**

7月8日(土)、15:00～18:00、第4校舎独立館2階D204教室

【2017 年度「庄内セミナー」

8月29日(火)～9月1日(金)
山形県鶴岡市(鶴岡タウンキャンパス他)

【HAPP】(秋)「国芳の魅力—講演とミニ展示—(仮)」

7月後半～10月後半、10月7日(土) 15:00～16:30
協生館藤原洋記念ホール

求ム・来往最前線情報!

所員の方々の研究・教育のご紹介をします。勉強会、研究会、講演会、ワークショップのお知らせ(日時・内容・研究会名・担当教員・連絡先)、著作刊行物がありましたら、情報をお寄せ下さい。教養研究センターへ: toiawase-lib@adst.keio.ac.jp
(各イベントのお問い合わせもこちらへ)

私の(ス)リ(ラ)ン(カ)宝(石)自(慢)

4月に教養研究センターに着任いたしました大澤と申します。宜しくお願いたします。スリランカは、インド洋に浮かぶ涙型の島で、宝石が沢山採れる国として知られています。4、5歳の頃にこの国に住んでいた私にとって、宝石は身近なものでした。濃く深い赤やピンク色のルビー、ムーンストーン、トパーズにサファイア、キャッツアイ……。大きな瞳をぎよろりとさせながら石に直接ペンライトを当て、色、丸み、光の筋、輝きなど品定めをする宝石商のオジサン達。駐在の日本人婦人宅に訪れる現地の宝石商の仕草は、今も鮮やかに思い出されます。ざらっと無造作に置かれた色とりどりの宝石をおはじきのようにして遊んでいたオジャマ虫の私に、小さな蒲鉾型のムーンストーンや紫色のアメジストをくれました。

それから年を重ね大人になり、当時母が身につけていたネックレスの古くなった金具部分を新しくしたり、小さなルビーを自分でデザインし指輪にしたりと、新たに楽しむようになりました。今も、家にあるスリランカの宝石を目にし、身につける度に、あの宝石商のオジサン達の瞳と、高地の紅茶畑のひんやり霧がかかった空気、オレンジ色の火花の中「仏蘭」を運び練り歩く象のお祭り、優しいメイドさんが作るカレーの香り……。かけがえのない宝物のような子供の頃の記憶が目覚め、私に不思議な力を与える気がしています。(大澤 綾)

